

入選

「16歳の私と17歳の私が見た世界」

茨城県立日立北高等学校2年 矢吹 友香

11月。父からの電話で、病院に至急来るように伝えられた私。車から降り救命救急室に入ろうとすると、中から「お父さん！お父さん！」「ねえ、じいちゃん！」と叫ぶ様な声。聞き覚えのある声で泣いている様だった。あれ、入る部屋はここ？一瞬そう思ったが、父に言われた部屋だから間違いない。恐る恐る入るとそこには人工呼吸器を付け、家族が周りを囲み、声を掛けられているのに全く反応を示さない、喘ぎ呼吸しかしない肌の白くなった祖父の姿があった。噫、私は夢を見ているに違いない。これは夢だ。自分に言い聞かせてみたものの、そこに居るのは私が見間違えるはずのない尊敬する祖父の姿だった。信じているから泣かない。私は泣かないんだ。周りの皆が泣きそうな声で祖父に呼びかけていても、おじいちゃん子の妹が大泣きした顔でいても泣かない。と思っていたのに目の前が霞む。さっきの決意はどうした、私。泣いているじゃないか。病院に運び込まれたその日の正午過ぎ、僅か70歳で祖父は息を引き取った。その時私は病院を恨んだ。通院し、持病の治療をしたり検査したりしていたじゃないか。どうして見付けられなかったんだ。病院って、医者って、こんなもんなのか。そう思っていた。

2月。学校の内科検診で心臓に異常有りと言われた妹の手術の日が来た。平日で私は学校があったが、その日は学校を休んで妹の手術に立ち会った。外見は何も変わらない、普通の中学1年生だ。心臓に穴が開いているから塞がなくてはいけない。その為には薬だけでは治らないので手術をしよう。と言われたものの、ほんの数ヶ月前に祖父の一件があったのだ。初めは引き受けようとした妹も、それ以来頑なに手術を拒否するようになった。気持ちは解らないでもないが、受けてもらわなくては困る。私達家族は妹まで失いたくないのだ。何とか説得させて、ようやく手術に漕ぎ着けた。手術室まで歩いて入って行った妹は、入り際に家族に眉を下げた笑顔で手を振り、そして入って行った。何時間経っただろう。ICUに入った妹を見て一安心したが、何とも複雑な気持ちであった。人工呼吸器を付け、体中に管を通し、まだ麻酔が残っているのか眠っている妹を見ているのだ。生きているのは嬉しい。だがこんなに沢山の管を付けてでしか生きられないのだろうかと思うとまた目の前が霞んだ。喜んでいる両親の手前、私は「ちょっとトイレに」と告げ、目元を拭った。今回は嬉しい。再び妹と話すことが出来るから。妹の病気は発見するのが難しい先天性の病気であった。それを見付けてくれた先生方、手術をしてくれた先生方、引き受けてくれた妹に感謝をした。当然暫くは入院することになり、なんとも辛そうにしている妹にしてやれることはないだろうかとは私は考えた。身の回りの事は母がしている。私が出来るのは傍にいて話相手になる位しかなかった。高1にもなってこれしか出来ない自分が少し情けなく思えたが、頼りにされ少し嬉しかった。

生きる事は素晴らしい。脳梗塞の父もネフローゼの母も皆今を生きている。社会では医療やら福祉やら何かと問題になっている。そんな中に生きる私が思ったことは、皆懸命に頑張っている、ということだ。祖父の件も妹の件も含めてそう思った。恨んだり色々黒い感情があったりしたが、懸命に頑張った結果がこれだというだけだ。誰も手を抜いた訳ではない。そういうことを思わせてくれた。

医療は完全ではない。日々進歩している。医療も生きているのだ。そう思ったら、医療もそんなに悪くないなと思った。そう思う私の今の夢は理学療法士になることだ。兎に角医療に携わりたいというのもあるが、日々生き続ける医療の傍で一緒に生きていきたいと願うからである。